広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 XXII・XXIII 2011. 3. 22

我が国の小学校音楽科教科書に見られる基礎の内容の変遷
—教育出版の教科書を対象として—

毛 利 彩 夏
（本講座大学院博士課程前期在学）

A Change of Basic Study in Primary School Textbooks of Music in Japan: A Case of Textbooks Published by Kyoiku-shuppan

Ayaka MOURI

Ⅰ. 研究の動機と目的

平成20年度に小学校学習指導要領が改訂され、共通事項が新たに設けられたことによって、確実に定着されるべき学習内容が明確化されたと言えよう。その中には、基礎的な内容も多く含まれている。平成20年度で新たに学習内容が見直され、基礎の内容が共通事項に挙がっているということは、やはり学習の過程で基礎は必要不可欠であることが再認識されるようになってきたからであると言えよう。本稿では、小学校音楽科教科書における基礎の内容を、抽出・分析することによって、それぞれの年代でどのような基礎の教育がおこなわれていたのかを明らかにすることを目的とする。

Ⅱ. 分析対象となる小学校音楽科教科書と分析方法

基礎の内容の学習は学習の初期段階でおこなわれるため、小学校を対象とし、小学校音楽科教科書を扱う。出版社は、昭和22年度の小学校学習指導要領に準拠した教科書から、現在まで継続して小学校音楽科教科書を出版している、教育出版のものを扱う。小学校音楽科教科書は、それぞれの小学校学習指導要領が施行された後に出版された最初のもので、昭和23年、昭和26年、昭和36年、昭和47年、昭和56年、平成4年、平成14年に発行されたものを資料とする。資料となる小学校音楽科教科書に見られる基礎の内容を、以下の5項目に分類し、分析・考察する。

1. リズム・拍子、2. 旋律・調性、3. 和声、4. 形式、5. 楽譜に関する知識

Ⅲ. 結果

1. 昭和23年発行の小学校音楽科教科書

以下に、基礎の内容の割合とその数、また基礎の各要素が扱われている割合を学年ごとに示す。以下の表において、網かけは割合が最大の学年を表している。

表1 昭和23年・教育出版・基礎の内容を扱う教材の割合と数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	全体
23% (5/22)	27% (6/22)	45% (10/22)	59% (13/22)	59% (13/22)	41% (9/22)	43% (56/132)

表2 昭和23年・教育出版・基礎の各項目の割合

	リズム・拍子	旋律・調性	和声	形式	楽譜の知識
第1学年	100% (5/5)	0% (0/5)	0% (0/5)	0% (0/5)	0% (0/5)
第2学年	100% (6/6)	0% (0/6)	0% (0/6)	0% (0/6)	0% (0/6)
第3学年	43% (6/14)	14% (2/14)	0% (0/14)	0% (0/14)	43% (6/14)
第4学年	27% (4/15)	20% (3/15)	7% (1/15)	0% (0/15)	47% (7/15)
第5学年	22% (4/18)	27% (6/18)	6% (1/18)	0% (0/18)	39% (7/18)
第6学年	10% (1/10)	40% (4/10)	10% (1/10)	0% (0/10)	30% (3/10)

基礎の内容を扱う教材の割合は、第4学年、第5学年が最大で、59%である。最小は第1学年で23%である。第4、5学年に向けて次第に割合が増加しており、第6学年で減少している。

リズム・拍子に関する内容は、第1学年、第2学年において100%を占めている。その後は、学年が上がるにつれて次第に減少し、第6学年では10%になっている。旋律・調性、和声に関する内容は、共に第6学年で最大となり、それぞれ、40%、10%という結果となった。旋律・調性は第3学年から取り入れられ、次第に増加し、第6学年で最大となっている。和声は第4学年から取り入れられているが、教材数はいずれの学年でも1教材のみであり、極めて少ない。形式に関する内容は、全学年をとおして0%である。楽譜に関する知識は、第4学年が最大で47%である。第2学年から取り入れられ、第4学年以降は減少している。

2. 昭和26年発行の小学校音楽科教科書

以下に、基礎の内容の割合とその数、また基礎の各要素が扱われている割合を学年ごとに示す。

表3　昭和26年・教育出版・基礎の内容を扱う教材の割合と数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	全体
36% (13/36)	49% (18/37)	52% (22/42)	60% (26/43)	67% (26/39)	62% (26/42)	55% (131/239)

表4　昭和26年・教育出版・基礎の各項目の割合

	リズム・拍子	旋律・調性	和声	形式	楽譜の知識
第1学年	71%（10/14）	0%（0/14）	0%（0/14）	0%（0/14）	29%（4/14）
第2学年	43%（9/21）	0%（0/21）	0%（0/21）	0%（0/21）	57%（12/21）
第3学年	39%（11/28）	21%（6/28）	0%（0/28）	0%（0/28）	39%（11/28）
第4学年	27%（10/37）	35%（13/37）	0%（0/37）	0%（0/37）	38%（14/37）
第5学年	13%（6/46）	28%（13/46）	20%（9/46）	15%（7/46）	24%（11/46）
第6学年	8%（3/40）	43%（17/40）	15%（6/40）	15%（6/40）	20%（8/40）

基礎の内容を扱う教材の割合は、第5学年が最大で67%である。最小は第1学年で36%である。第1学年から第5学年までは、学年が上がるごとに増加し、第6学年では減少している。昭和23年のものと比較すると、最大になる学年はほぼ共通していが、その割合は昭和26年の方が8%上回っている。また、全体の割合も昭和26年の方が12%上回っている。教育出版では、昭和26年発行の小学校音楽科教科書の方が、より基礎の内容が充実していると言える。

リズム・拍子は全学年で扱われ、第1学年が最大で71%である。昭和23年では第1、2学年でリズム・拍子が100%を占めていたが、昭和26年では第1学年から楽譜に関する知識も扱われるようになった。旋律・調性は、昭和23年と同様に第3学年から扱われ、第6学年が最大で43%になっている。和声は、昭和23年のものとは1年遅れた第5学年から扱われ、第5学年が最大で20%である。形式は、第5学年から扱われ、第5学年、第6学年共に15%である。昭和23年では形式に関しては全く扱われていなかったため、大きな変化であると言える。楽譜に関する知識は全学年で扱われ、第2学年が最大で57%である。昭和23年では第3学年から扱われているが、昭和26年では第1学年から扱われており、学習の開始時期が早くなっている。

3. 昭和36年発行の小学校音楽科教科書

以下に、基礎の内容の割合とその数、また基礎の各要素が扱われている割合を学年ごとに示す。

表4　昭和26年・教育出版・基礎の各項目の割合

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	全体
21% (9/42)	38% (16/42)	37% (19/52)	32% (16/50)	51% (25/49)	33% (17/52)	36% (102/287)

表 6　昭和 36 年・教育出版・基礎の各項目の割合

	リズム・拍子	旋律・調性	和声	形式	楽譜の知識
第 1 学年	67%（8/12）	0%（0/12）	0%（0/12）	0%（0/12）	33%（4/12）
第 2 学年	68%（15/22）	0%（0/22）	0%（0/22）	0%（0/22）	32%（7/22）
第 3 学年	21%（6/28）	18%（5/28）	21%（6/28）	0%（0/28）	39%（11/28）
第 4 学年	23%（5/22）	9%（2/22）	18%（4/22）	0%（0/22）	50%（11/22）
第 5 学年	21%（8/38）	29%（11/38）	21%（8/38）	3%（1/38）	26%（10/38）
第 6 学年	29%（7/24）	38%（9/24）	29%（7/24）	0%（0/24）	4%（1/24）

基礎の内容を扱う教材の割合は、第 5 学年が最大で 51%である。最小は第 1 学年で 21%である。第 2 学年は第 1 学年より割合が高くなっているが、第 3 学年、第 4 学年と上がるにつれて割合が低くなっている。昭和 26 年と比較すると、最大が第 5 学年であることは共通しているが、昭和 36 年の方が 16%低くなっている。全体を見ても、昭和 36 年が 19%下回っており、基礎の内容が減少している。

リズム・拍子は全学年で扱われるが、低学年を中心に学習されることが明確にわかる結果となった。昭和 26 年では第 1 学年が最大であったが、昭和 36 年では第 2 学年が最大で 68%であるが、割合は 3%ではあるが低くなっている。旋律・調性は、昭和 26 年と同様に第 2 学年から扱われ、第 6 学年が最大で 38%であるが、昭和 26 年より 5%割合が低くなっている。昭和 26 年と異なり、高学年を中心に学習されることがわかる。和声は第 2 学年から扱われ、第 6 学年が最大で 29%である。これまでの教育出版発行の小学校音楽科教科書中で、最も学習の開始時期が早い。最大の割合も昭和 26 年より 9%上がり、和声の学習の充実が図られている。形式は第 5 学年のみで扱われ、割合は 3%まで下がっている。楽譜に関する知識は全学年で扱われ、第 4 学年が最大で 50%である。最大の割合は昭和 26 年より 7%低くなっている。昭和 26 年と異なり、中学年を中心に学習される。

4. 昭和 47 年発行の小学校音楽科教科書

以下に、基礎の内容の割合とその数、また基礎の各要素が扱われている割合を学年ごとに示す。

表 7　昭和 47 年・教育出版・基礎の内容を扱う教材の割合と数

第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年	第 4 学年	第 5 学年	第 6 学年	全体
47% (27/57)	43% (24/56)	31% (17/55)	32% (18/57)	33% (18/54)	28% (15/54)	36% (119/333)

表 8　昭和 47 年・教育出版・基礎の各項目の割合

	リズム・拍子	旋律・調性	和声	形式	楽譜の知識
第 1 学年	54%(22/41)	5%(2/41)	5%(2/41)	0%(0/41)	37%(15/41)
第 2 学年	30%(11/37)	11%(4/37)	16%(6/37)	0%(0/37)	43%(16/37)
第 3 学年	32%(8/25)	28%(7/25)	8%(2/25)	0%(0/25)	32%(8/25)
第 4 学年	16%(4/25)	32%(8/25)	12%(3/25)	4%(1/25)	36%(9/25)
第 5 学年	5%(1/21)	38%(8/21)	19%(4/21)	19%(4/21)	19%(4/21)
第 6 学年	5%(1/20)	40%(8/20)	10%(2/20)	25%(5/20)	20%(4/20)

基礎の内容を扱う教材の割合は、第 1 学年が最大で 47%である。最小は第 6 学年で 28%である。これまで、基礎の内容を扱う教材の割合が最大になる学年は高学年であったが、昭和 47 年では初めて低学年である。中学年、高学年よりも低学年で扱われる割合が高い。昭和 43 年度の小学校学習指導要領では、新たに基礎領域が設けられたため、これまでよりも基礎を重要視していると考えられたが、割合だけ見ると、最大の割合は昭和 36 年より 4%低く、全体の割合は同数である。

リズム・拍子は全学年で扱われ、第 1 学年が最大で 54%であり、やはり小学校前半の学年を中心に学習される。最大の割合がこれまでに比べ低くなっているが、これは第 1 学年から旋律・調性、和声の学習が取り入れられるようになったからである。旋律・調性は第 1 学年から全学年で扱われ、第 6 学年が最大で 40%である。和声も第 1 学年から全学年で扱われ、第 5 学年が最大で 19%である。形式は第 3 学年から扱われ、第 6 学年が最大で 25%である。楽譜に関する知識は全学年で扱われ、第 2 学年が最大で 43%である。これまでに比べて、それぞれの要素で割合が低くなっているように見えるが、これは 1 つの学年で多くの要素を学習するためである。第 1 学年から 4 つの要素を扱っているという点は、大きな変化であ

ると言えよう。

5. 昭和56年発行の小学校音楽科教科書

以下に、基礎の内容の割合とその数、また基礎の各要素が扱われている割合を学年ごとに示す。

表9　昭和56年・教育出版・基礎の内容を扱う教材の割合と数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	全体
24% (10/42)	31% (12/39)	18% (8/44)	24% (10/42)	21% (8/38)	11% (4/38)	21% (52/243)

表10　昭和56年・教育出版・基礎の各項目の割合

	リズム・拍子	旋律・調性	和声	形式	楽譜の知識
第1学年	90% (9/10)	10% (1/10)	0% (0/10)	0% (0/10)	0% (0/10)
第2学年	50% (8/16)	13% (2/16)	0% (0/16)	0% (0/16)	38% (6/16)
第3学年	36% (4/11)	0% (0/11)	0% (0/11)	0% (0/11)	64% (7/11)
第4学年	47% (7/15)	7% (1/15)	0% (0/15)	0% (0/15)	47% (7/15)
第5学年	27% (3/11)	27% (3/11)	0% (0/11)	0% (0/11)	45% (5/11)
第6学年	40% (2/5)	20% (1/5)	0% (0/5)	0% (0/5)	40% (2/5)

基礎の内容を扱う教材の割合は、第2学年が最大で31%である。最小は第6学年で11%である。昭和47年と同様に、低学年で割合が最大になっている。しかし、昭和47年と比較すると最大の割合が16%低下している。全体を見ても15%低下しており、これまでで最も低い結果となった。

リズム・拍子は全学年で扱われ、第1学年が最大で90%である。昭和47年と比較すると大幅に割合が高くなっているが、これは、第1学年で扱われる要素が少ないからである。旋律・調性は第3学年を除いて扱われ、第5学年が最大で27%である。高学年で最も割合が高いことはこれまでと同様であるが、これまでは第6学年で最大であったため、若干の違いが見られる。和声と形式は、昭和56年では全く扱われていない。形式に関しては全く扱われない年もあったが、和声に関して全く扱われないのは昭和56年が初めてである。楽譜に関する知識は第2学年から扱われ、第3学年が最大で64%である。昭和26年以降は第1学年から楽譜に関する知識を扱っていたが、昭和56年では第2学年からになり、後退している。

6. 平成4年発行の小学校音楽科教科書

以下に、基礎の内容の割合とその数、また基礎の各要素が扱われている割合を学年ごとに示す。

表11　平成4年・教育出版・基礎の内容を扱う教材の割合と数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	全体
51% (20/39)	63% (22/35)	14% (6/44)	17% (7/41)	18% (7/38)	8% (3/37)	28% (65/234)

表12　平成4年・教育出版・基礎の各項目の割合

	リズム・拍子	旋律・調性	和声	形式	楽譜の知識
第1学年	100% (20/20)	0% (0/20)	0% (0/20)	0% (0/20)	0% (0/20)
第2学年	67% (20/30)	3% (1/30)	0% (0/30)	0% (0/30)	30% (9/30)
第3学年	11% (1/9)	11% (1/9)	11% (1/9)	0% (0/9)	67% (6/9)
第4学年	13% (1/8)	13% (1/8)	0% (0/8)	0% (0/8)	75% (6/8)
第5学年	11% (1/9)	11% (1/9)	11% (1/9)	11% (1/9)	56% (5/9)
第6学年	25% (1/4)	25% (1/4)	0% (0/4)	0% (0/4)	50% (2/4)

基礎の内容を扱う教材の割合は、第2学年が最大で63%である。最小は第6学年で8%である。平成4年もまた、低学年での割合が高い。昭和56年と比較すると、最大の割合が倍以上高くなっている。全体の割合も7%高くなっている。

リズム・拍子は全学年で扱われ、第1学年が最大で100%である。第1学年においてはリズム・拍子しか扱われなくなった。旋律・調性は昭和56年より1年遅く第2学年から扱われ、第6学年が最大で25%である。昭和56年で扱われていなかった和声は、第3学年と第5学年で扱われ、共に11%である。同様に昭和56年で扱われていなかった形式も、第5学年のみで扱われており、11%である。楽譜に関する知

識は昭和56年と同様に第2学年から扱われ、第4学年が最大で75%を占めている。

7. 平成14年発行の小学校音楽科教科書

以下に、基礎の内容の割合とその数、また基礎の各要素が扱われている割合を学年ごとに示す。

表13　平成14年・教育出版・基礎の内容を扱う教材の割合と数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	全体
26% (9/34)	39% (13/33)	16% (6/37)	32% (12/38)	29% (11/38)	17% (6/36)	26% (57/216)

表14　平成14年・教育出版・基礎の各項目の割合

	リズム・拍子	旋律・調性	和声	形式	楽譜の知識
第1学年	100% (9/9)	0% (0/9)	0% (0/9)	0% (0/9)	0% (0/9)
第2学年	47% (8/17)	0% (0/17)	0% (0/17)	0% (0/17)	53% (9/17)
第3学年	33% (2/6)	0% (0/6)	0% (0/6)	0% (0/6)	67% (4/6)
第4学年	47% (8/17)	0% (0/17)	0% (0/17)	0% (0/17)	53% (9/17)
第5学年	20% (3/15)	13% (2/15)	13% (2/15)	7% (1/15)	47% (7/15)
第6学年	29% (2/7)	14% (1/7)	29% (2/7)	0% (0/7)	29% (2/7)

基礎の内容を扱う教材の割合は、第2学年が最大で39%である。最小は第3学年で16%である。最大の割合は平成4年より24%低くなっている。

リズム・拍子は平成4年と同様に全学年で扱われ、第1学年が最大で100%である。旋律・調性、和声は共に第5、6学年で扱われ、第6学年が最大で、それぞれ14%、29%である。旋律・調性は、これまで少なくとも中学年から扱われていたが、平成14年で初めて高学年のみの扱いとなった。形式は第5学年のみで7%である。楽譜に関する知識は第2学年から扱われ、第3学年が最大で67%である。

Ⅳ. 考察

(1) 基礎の内容を扱う教材の割合

以下に、教育出版の小学校音楽科教科書における、基礎の内容を扱う教材の割合を学年別にまとめたものを示す。

表15　教育出版・基礎の内容を扱う教材の割合

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	全体
昭和23年	23%	27%	45%	59%	59%	41%	43%
昭和26年	36%	49%	52%	60%	67%	62%	55%
昭和36年	21%	38%	37%	32%	51%	33%	36%
昭和47年	47%	43%	31%	32%	33%	28%	36%
昭和56年	24%	31%	18%	24%	21%	11%	21%
平成4年	51%	63%	14%	17%	18%	8%	28%
平成14年	26%	39%	16%	32%	29%	17%	26%

基礎の内容を扱う教材の割合が最大の学年は、前半の昭和23年、昭和26年、昭和36年では高学年であり、それ以降の昭和47年、昭和56年、平成4年、平成14年では低学年になっている。このことから、年代によって基礎の扱い方が違うことがわかる。これまで見てきたように、基礎の要素の中で、リズム・拍子以外の4項目は比較的難易度が高く、知的理解を伴う内容であった。そのため昭和23年から昭和36年では、児童の発達段階に合わせて、より理解が可能であろう高学年に基礎の内容を多く配置したと考えられる。反対に、基礎の内容が低学年で最大である昭和47年から平成14年では、小学校音楽科教科書における学習内容の提示方法を見てみると、児童が理解しやすい工夫が多く施され、低学年でも理解が可能になるように改善されている。

全体の割合を見てみると、昭和26年が最大で55%、昭和56年が最小で21%であった。昭和26年が最大である理由として、昭和26年度の小学校学習指導要領（試案）では、基礎の学習内容が詳細に記載されていたことが考えられる。一方、昭和56年で最小になったのは、ゆとり教育の方針の影響で学習内容が大幅に削減されたことが原因であろう。

(2) リズム・拍子

以下に、リズム・拍子が扱われていた割合を学年ごとにまとめたものを示す。

表 16　教育出版・リズム・拍子の割合

	第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年	第 4 学年	第 5 学年	第 6 学年
昭和 23 年	100%	100%	43%	27%	22%	10%
昭和 26 年	71%	43%	39%	27%	13%	8%
昭和 36 年	67%	68%	21%	23%	21%	29%
昭和 47 年	54%	30%	32%	16%	5%	5%
昭和 56 年	90%	50%	36%	47%	27%	40%
平成 4 年	100%	67%	11%	13%	11%	25%
平成 14 年	100%	47%	33%	47%	20%	29%

リズム・拍子は、いずれの年も低学年を中心に扱われている。特に、昭和 23 年、昭和 4 年、昭和 14 年では 100%を占めており、低学年におけるリズム・拍子の学習が充実していることがわかる。リズム・拍子にこのような傾向が見られるのは、昭和 22 年度の小学校学習指導要領にもあったように、リズム（拍子）は音楽の最も基本的な要素であることや、感覚的、運動的な心理段階にある小学校低学年では、音楽の基礎となる諸要素の中でも、リズム（拍子）を身体的に身に付けさせることが適当であることが理由として挙げられる。そのため、いずれの年でも低学年におけるリズム・拍子の学習は、手や楽器でリズムや拍子を打つという内容がほとんどである。学年が上がるにつれて複雑なリズムの練習へと発展する点も、全ての年代で一致しており、リズム・拍子に関しては年代による変化はほとんど見られなかった。

(3) 旋律・調性

以下に、旋律・調性が扱われていた割合を学年ごとにまとめたものを示す。

表 17　教育出版・旋律・調性の割合

	第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年	第 4 学年	第 5 学年	第 6 学年
昭和 23 年	0%	0%	14%	20%	27%	40%
昭和 26 年	0%	0%	21%	35%	28%	43%
昭和 36 年	0%	0%	18%	9%	29%	38%
昭和 47 年	5%	11%	28%	32%	38%	40%
昭和 56 年	10%	13%	0%	7%	27%	20%
平成 4 年	0%	3%	11%	13%	11%	25%
平成 14 年	0%	0%	0%	0%	13%	14%

旋律・調性は、いずれの年も高学年を中心に扱われている。昭和 23 年から昭和 36 年までは第 3 学年から扱われているが、昭和 47 年、昭和 56 年では第 1 学年から扱われている。昭和 47 年と昭和 56 年の低学年で扱う内容は、新たな内容を加えるのではなく、それまで第 3 学年以上で学習されていた内容の中から、低学年に適した内容を選択して取り入れている。昭和 47 年と昭和 56 年では、準拠している小学校学習指導要領の性格に大きな違いがあるが、両者とも第 1 学年から旋律・調性を扱っていることは非常に興味深い結果である。昭和 56 年では、学習内容の削減を余儀なくされながらも、旋律・調性の学習の必要性が重視されていたのであろうか。平成 4 年では第 2 学年から、平成 14 年では第 5 学年からと、次第に扱われる学年が上がっており、旋律・調性に関しては扱われる学年に変化が見られた。

(4) 和声

以下に、和声が扱われていた割合を学年ごとにまとめたものを示す。

表 18　教育出版・和声の割合

	第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年	第 4 学年	第 5 学年	第 6 学年
昭和 23 年	0%	0%	0%	7%	6%	10%
昭和 26 年	0%	0%	0%	0%	20%	15%
昭和 36 年	0%	0%	21%	18%	21%	29%
昭和 47 年	5%	16%	8%	12%	19%	10%
昭和 56 年	0%	0%	0%	0%	0%	0%
平成 4 年	0%	0%	11%	0%	11%	0%
平成 14 年	0%	0%	0%	0%	13%	29%

和声は、平成4年を除いて低学年で扱われることはない。旋律・調性と同様に、いずれの年も高学年中心であるが、その割合は全体的に少ない。また、小学校学習指導要領において和声に関して全く触れていない年はなかったが、学習内容の大幅削減が実施された昭和56年では和声を全く扱っていない。このような結果から、和声は児童にとって比較的難易度の高い内容であり、児童の発達段階に合わせて学習する時期を選択することが必要であるということが考えられる。

(5) 形式

以下に、形式が扱われていた割合を学年ごとにまとめたものを示す。

表19　教育出版・形式の割合

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
昭和23年	0%	0%	0%	0%	0%	0%
昭和26年	0%	0%	0%	0%	15%	15%
昭和36年	0%	0%	0%	0%	3%	0%
昭和47年	0%	0%	0%	4%	19%	25%
昭和56年	0%	0%	0%	0%	0%	0%
平成4年	0%	0%	0%	0%	11%	0%
平成14年	0%	0%	0%	0%	7%	0%

形式は、昭和23年と昭和56年では全く扱われていない。その他の年も昭和47年で第4学年から扱われている以外は、高学年を中心に扱われている。形式に関しては、昭和52年度以降、小学校学習指導要領でも触れられておらず、和声よりも難易度の高い内容であると言える。旋律・調性の学習と関連させて、感覚的に形式をとらえることは可能であろうが、やはり最終的には知識と結び付ける必要があるため、児童には理解が困難な要素であるかもしれない。

(6) 楽譜に関する知識

以下に、楽譜に関する知識が扱われていた割合を学年ごとにまとめたものを示す。

表20　教育出版・楽譜に関する知識の割合

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
昭和23年	0%	0%	43%	47%	39%	30%
昭和26年	29%	57%	39%	38%	24%	20%
昭和36年	33%	32%	39%	50%	26%	4%
昭和47年	37%	43%	32%	36%	19%	20%
昭和56年	0%	38%	64%	47%	45%	40%
平成4年	0%	30%	67%	75%	56%	50%
平成14年	0%	53%	67%	53%	47%	29%

楽譜に関する知識は、第2学年から第4学年を中心に学習されている。学習内容は階名や、楽譜上の記号や用語、楽譜の読み方に至るまで多岐にわたるが、これらの内容は音楽を学習する際に欠くことのできない内容である。そのため、複数の学年にわたって継続的に学習されており、学習内容が削減された昭和56年以降も割合が減少することはない。楽譜に関する知識は、音楽を学習する際に必要不可欠な基礎の中の基礎と言えるであろう。

V. 総括

リズム・拍子に関しては、低学年で扱われる割合が高い。それは、リズムや拍子が音楽を学習する際の基盤になるものであるからだけでなく、身体活動を伴って学習することが可能であるため、低学年の児童に適した学習内容であるからである。昭和43年の小学校学習指導要領に準拠した小学校音楽科教科書では高度な内容も見られたが、その後学習内容が削減されると、低学年ではほとんどが遊びを交えて身体でリズムや拍子をとるという内容になっている。このように、リズム・拍子は学習内容を容易にすることが可能であり、低学年から取り入れるのに適している。

旋律・調性は、中学年から高学年で主に扱われていた。最終的にはさまざまな調を音階などを参考にしながら理解したり、曲の終止や曲の山などを理解したりすることを狙っている。しかし低学年では、旋律

の雰囲気を感じることや、旋律を比べることなど、可能な限り学習が容易な内容を扱っており、そのような傾向は、昭和52年度以降の小学校学習指導要領に準拠する小学校音楽科教科書に多く見られる。旋律・調性は、低学年の児童でも学習可能な内容を工夫しながら、最終的に習得させたい内容を中学年以降に配置している。

和声は高学年で扱われていた。学習内容は、リズム・拍子、旋律・調性のように知識を交えながら段階を踏んで確実な定着を図るという意図は見られず、年によっては各調の和声を提示しているだけのものも存在した。和声の学習に関して内容が充実していると思われる小学校音楽科教科書では、和声の学習のために和音を含んだ短い曲が多く掲載されていたが、これも和声を感覚的に習得するというものであり、知識と結び付けるというような内容までは見られなかった。和声は、高学年に配置され、感覚的に身に付けることまでを想定して学習内容が考えられている。

形式は高学年で少し扱われる年もあったが、全く扱われていない年も多く見られた。形式は、旋律・調性の内容と関連性があり、旋律・調性の学習を発展させて形式の学習につなぐことができる。したがって形式は、旋律・調性の内容を知識として集約したものであると言える。和声と同様に、児童にとって知識として理解することは困難であるためか、知識としての学習である形式はほとんど扱われていないと言えよう。

楽譜に関する知識は、低学年から中学年を中心に扱われていた。その内容からも、音楽を学習する際に欠くことのできない知識であることが明白である。楽譜に関する知識の中にも難易度の差は存在するが、音楽活動に最低限必要な記号や用語も含んでいるため、知識でありながらも低学年から多く扱われていると考えられる。楽譜に関する知識は、知識でありながら欠くことのできない要素であるため、以上のようなさまざまな工夫が見られた。

Ⅵ. 参考文献

・平尾貴四男、大坪喜作『口をそろえて』教育出版、1948。
・平尾貴四男、大坪喜作『きれいな声で』教育出版、1948。
・平尾貴四男、大坪喜作『みんなで歌う』教育出版、1948。
・平尾貴四男、大坪喜作『あの音あの声』教育出版、1948。
・平尾貴四男、大坪喜作『世界の音楽』教育出版、1948。
・平尾貴四男、大坪喜作『てをうちながら』教育出版、1949。
・池内友次郎ほか『しょうがくおんがく 1』教育出版、1979。
・池内友次郎ほか『小学音楽 2』教育出版、1979。
・池内友次郎ほか『小学音楽 3』教育出版、1979。
・池内友次郎ほか『小学音楽 4』教育出版、1979。
・池内友次郎ほか『小学音楽 5』教育出版、1979。
・池内友次郎ほか『小学音楽 6』教育出版、1979。
・池内友次郎、有賀正助、渡辺学『新版　標準おんがく 1 ねん』教育出版、1972。
・池内友次郎、有賀正助、渡辺学『新版　標準おんがく 2 年』教育出版、1972。
・池内友次郎、有賀正助、渡辺学『新版　標準音楽 3 年』教育出版、1972。
・池内友次郎、有賀正助、渡辺学『新版　標準音楽 4 年』教育出版、1972。
・池内友次郎、有賀正助、渡辺学『新版　標準音楽 5 年』教育出版、1972。
・池内友次郎、有賀正助、渡辺学『新版　標準音楽 6 年』教育出版、1972。
・池内友次郎、木下保監修、有賀正助、宍戸馨『標準しょうがくせいのおんがく 1』教育出版、1960。
・池内友次郎、木下保監修、有賀正助、宍戸馨『標準しょうがくせいのおんがく 2』教育出版、1960。
・池内友次郎、木下保監修、有賀正助、宍戸馨『標準　小学生の音楽 3』教育出版、1960。
・池内友次郎、木下保監修、有賀正助、宍戸馨『標準　小学生の音楽 4』教育出版、1960。
・池内友次郎、木下保監修、有賀正助、宍戸馨『標準　小学生の音楽 5』教育出版、1960。
・池内友次郎、木下保監修、有賀正助、宍戸馨『標準　小学生の音楽 6』教育出版、1960。
・加藤成之、池内友次郎、有賀正助、宍戸馨、三浦規編『しょうがくせいのおんがく』教育出版、1951。

・加藤成之、池内友次郎、有賀正助、宍戸馨、三浦規編『しょうがくせいのおんがく 2』教育出版、1951。
・加藤成之、池内友次郎、有賀正助、宍戸馨、三浦規編『小学生の音楽 3』教育出版、1951。
・加藤成之、池内友次郎、有賀正助、宍戸馨、三浦規編『小学生の音楽 4』教育出版、1951。
・加藤成之、池内友次郎、有賀正助、宍戸馨、三浦規編『小学生の音楽 5』教育出版、1951。
・三善晃ほか『新版　おんがく 1』教育出版、1991。
・三善晃ほか『新版　音楽 2』教育出版、1991。
・三善晃ほか『新版　音楽 3』教育出版、1991。
・三善晃ほか『新版　音楽 4』教育出版、1991。
・三善晃ほか『新版　音楽 5』教育出版、1991。
・三善晃ほか『新版　音楽 6』教育出版、1991。
・三善晃ほか『小学校音楽　おんがくのおくりもの 1』教育出版、2001。
・三善晃ほか『小学校音楽　音楽のおくりもの 2』教育出版、2001。
・三善晃ほか『小学校音楽　音楽のおくりもの 3』教育出版、2001。
・三善晃ほか『小学校音楽　音楽のおくりもの 4』教育出版、2001。
・三善晃ほか『小学校音楽　音楽のおくりもの 5』教育出版、2001。
・三善晃ほか『小学校音楽　音楽のおくりもの 6』教育出版、2001。